

英語音声教材の分類法と意義

鈴木 繁 一

I 分類法

語学ラボラトリーには授業・自習のための音声教材が多数備えられるので、それらを分類して管理せねばならない。本学LLでは、普遍性を有しつつ簡便で柔軟性に富んだ分類法をめざして、工夫を重ねてきた。

1 備付け・分類の対象

原則として、「学習される外国語の音声が入った教材」に限っている。英語教員養成教材とコンピュータ使用語学教材については、外国語音声が必要条件としていない。日本語学習用教材は今のところ備えていない。

英語音声教材分類表をまず作成し、他の外国語音声教材に準用している。この点はさらに研究が必要である。

2 管理の条件

開架式、分類排架、貸し出さない、教材数、スタッフ。

受入原簿を磁気ディスクの形で作成、分類目録を二次的に作る。

3 分類の基本方針

主題重視、メディア別にしない、簡便（請求記号を設けない）、柔軟性（変更・追加が容易）、普遍性（図書分類、以前のやり方、他のLLの分類法、教育・出版界の慣習を参照）

4 主題の抽出

A 文法、語彙、基本表現 B 英語音声学 C 基本技能（聞く、

話す、読む、書く） D 会話 E 評価（英検、TOEFL、他）

F 応用技術（演説法、討論法、放送英語、ビジネス英語、他）

G 英語教育（早期、中学、高校、大学、教員養成、CAI、他）

H 他分野（文芸、うた、映画、演説、討論、インタビュ、英語史、他）（I 定期受入教材）

5 「LL語学教材分類表・英語」

II 意義

日本語を母国語とし日本の学校で英語を学んできた学生に対する、日本の大学における教養課程第一外国語としての英語教育の目標は、教養としての英語読書力の養成であったと言えよう。目標到達は厳しく要求しなかった。音声面は、学生に一度音読させ注意を与え、手本を聞かせるのであった。表現能力の養成には消極的であった。音声面・時間条件（敏速さ）に極度に寛大であった。個人的により高い技能目標をもってESSなどで努力した場合、素質や友人に恵まれれば成果を上げることができた。

今日、英語学習への動機づけが高まる状況にある。これからあるべき一般的目標は、例えば次のようであると思われる。

中級の読解力、それをやや下回る聴解力、それをやや下回る作文力、基本会話力（すべて現実的時間条件で）

このような目標を達成する上で、特に聞く、話す技能の向上のために音声教材の有効性が期待されるが、このことについて実践的立場から考える。分析的に扱うが、現実の学習過程では、以下の各項の部分的学習の効果は重なることが少なくない。

1 四技能と入学時の状況

四つの言語技能につき、文法・語彙・基本表現、音声、文字の各要素の有無、有の場合受容レベルでよいか表出レベルが必要か、

各技能に必要な器官は何かを示すと、四技能の区別が明確になる。

次に、学生が入学以前に知りあるいは習得している事柄を素描する。ほとんどの文法事項は学習した覚えがあるが、敏速に操作できるまでに習熟していない。数千語の単語と一応の基本表現を知っているが、選ばれたものが表出レベルまで確実に強化されていない。注意深くなされる発音は識別でき、自らも一応発音できるが、日本人が弱いとされている点は習得しないままになっている。自然速度の音声の広範な学習はこれからである。綴りの識別はさして困難ではないが、綴るほうはやや不確実である。総じて時間を多く与えあるいは繰り返し聞かせると、技能を示すことができる。読解力が比較的着実に達成されている。

2 文法・語彙・基本表現

これは四技能に共通の要素である。話す、読む、書く技能、およびゆっくり話される音声聞き取る力を制約している最も基本的な要因であろう。

a 統語法・動詞型を中心に文を組み立てるのに重要な事項に重点をおき、一度に五つほどの例文を対象とし、訳文などのキユーから例文が即座に口頭で答えられるようにする(何のための例文か理解していること)。例文を吹き込んだ音声教材のあることが非常に望ましい。例文を正しく音読できなければならぬし、内容の記憶・発声器官の運動的記憶に加えて聴覚的記憶も動員できれば、自信をもって円滑に応答できるからである。多少の変換練習もする。実用的文法は完全習得を目標とする。

b 受容語彙はまだ拡大・強化していかねばならない。文脈の中で接した語句はできるだけ記憶すべきである。語句リストで暗記してよいものも多い。リストは語のコロケーションも適宜

示すべきであり、ある程度の種類別包括性のあるものがよい。音声教材はチェック用に有用であろう。

c 表出語彙と基本表現は、キユーに応じて即答できるようにならねばならない。対象を限定し、完全習得を目標とする。多くの学生にとってスピーキング、ライティングの初歩的でかつ重要な課題である。ボーズ入り音声教材は非常に有用であろう。

3 リスニング

書いてあるとすれば容易に読み取れるであろう語句・テキストの、音声として与えられているものの聴解力について考える。自然速度音声の音声的・音韻的識別、短期記憶、連続リスニングを問題としたい。

a 音識別力の向上では、英語音声学の援用が中心となる。母音・子音の発音原理、異音、子音連結、機能語の弱形、リンキング、無解放破裂音、同化・異化、脱落・割込み、連接、ストレス、リズム、イントネーション等々がその内容であり、リスニングのコース教材に織り込まれている。これらについて知識の欠如をうめ、発音・発声を試みて理解し、聞き取るようにする。基本事項はすでに学習しているので、全体の見通しを与え、必要な事項を選んで解説し練習させる。LLでの授業効果が大きく、ボーズ入り音声教材が不可欠である。映像も非常に有益である。

b 聴取した短文から必要な内容を理解するまで、数秒間その短文を記憶していなければならない。頭脳と意志および集中力の問題である。短文を聞いて口頭で繰り返す練習により短期記憶力を鍛え、気後れなくより長い音声材料のリスニングに臨めるようにする。聞き取りテストではないので、既知の短文を使って反復練習して差し支えない。ボーズ入り音声教材が不可欠である。

c いくつもの文を連続して聞きながら敏速に内容を理解していく総合的聴解力の強化法は、平易なものを十分に多聴し、次の段階の多聴に移るやり方が中心となる。グレード別リスニング教材を使用するほか、英語学習者のための音声ジャーナルや英語放送が格好の目標となる。音声教材は不可欠である。多くの学生の場合聴解力を読解力に近づけていくことになるが、読解力にもブラスの効果が期待できる。容易に読めるレベルのものを集中的に多読・多聴することが、表出能力の堅固な基盤となる。

4 スピーキング

2のa・cの条件を前提とし、(1)伝達内容を形成し、(2)それを敏速に言語化し、(3)音声として発することが必要であるが、音声教材を用いて(3)の十分な能力をつけることができる。

a 英語音声学の事項のうち、口語体およびフォーマルな口語体(J・D・オコナー)のスピーキングに必要なものを躊躇なく使用できるようにする。できるだけ早期に、音声を苦勞なく出せるようにすべきである。小人数直接指導が必要であるがL1での授業効果も大きく、ボーズ入り音声教材が不可欠で映像も非常に有益である。これですす学習内容を学ぶ。さらに、より長いテキストを用い音声教材を手本にしたオーラル・リーディング練習を加える。通常はテキストを見て行いが、一部は暗唱をする。練習の結果は教師がチェックしなければならない。

b 発話内容を敏速に英語としてまとめる(2)の指導においては、学習者の独自発話に即時に応じた指導が必要である。音声教材は応用される素材やヒントを提供できるのみである。しかし目標レベルを適切に設定しなければならない。基本会話の重点はあらか

じめ学習した基本文の適用・応用であり、日常の交際、買物、電話、旅行等の英語は決して難しくない。場面・機能に応じた会話の短いコースを行いながら発話内容を肉付けして行けばよい。基本会話では音声教材の効用は大きく、教材は豊富である。自由使用を求めるのに急でこの段階を軽視してはならない。

5 結論

(1) 学生は入門段階ではないので、音声学的理解を与えつつ、音識別および躊躇のない発音・発声という聴覚的・器官的能力を、文法・意味的負荷の少ない練習で早急に確立すべきである。このこととリスニング全般において、音声教材は極めて大きく寄与することができる。

(2) 音声技能教育のこのような面での教師の仕事は、学習内容の見通しを与え、適切な教材を示し、導入・指導をし、結果をチェックし再指導することであるが、練習そのものでは学生の自習の比重が極めて高い。学生側の条件のため、達成度・伸長度が非常に不揃いになることを受け入れなければならないであろう。

(3) 信頼できる手本にならって口頭で繰り返すことと多聴という単純なやり方で、平素達成できることは多い。このような準備の上に立って、母国語話者教師との時間や海外研修での時間の多くを自由使用練習に使いたい。

(4) 音声教材は、英語音声学、基本表現、リスニング、オーラル・リーディング、会話等の分野では良いものが豊富である。動詞型・形容詞型・名詞型を網羅的に扱った音声教材の制作が望まれる。